第三席　宿善と無宿善

今お助けにあへ

一　昨日荒削りの話をした、兎も角も平生業成といふ事は眞宗では、性根心地の確かな時に、何時命終つても大丈夫と往生を手握りさせて貰ふ、それでなければ喜べるもので無い、今お助けにあふて見えん淨土も見たよりも拜んだよりも確かに喜べるのである。それが昨日話をした平生業成の大體の事である。

平生業成といふ事はたつた今往生を握る事、何時でも宜しい、何時でも大丈夫、それはどうしたら確かになれるかといふについて、あんた方一年中聽聞して居るが餘り仰山聞いて居るので愈譯がわからんやうになつてしまふ。往生を握るにはどこで握る、向ふ向いては握れん、詰り我が心と御淨土と差向ひになると駄目、何故か五十二段も違ふ所であるから見る事も出來ぬ、拜む事も出來ぬ、思ひはかる事も出來ぬ、考へて見る事も出來ぬ此の心とお淨土と差向ひになる事が自力、お淨土參りに安心しよう落着かうと思つてはいかん、それは思へば思ふ程困る、平生業成はこれと向きが違ふ。御淨土參りを今から確かになりたいと思ふならば、目的目當とする御淨土の方に心を向けてはいかん。吾々が希望して居る目的として居る御淨土といふものは五十二段も違ふで、思や思ふ程苦しむばかりで安心出來はせん。然らばどうしたら安心出來るか手握り出來るかといふと、今お助けにあへ、今お助けにあふたものならば、命終つた向ふの事は見えんでも大丈夫、知れんでも大丈夫、今お助けになつた所を抑へるから向ふは見えんでも何時でもと喜ばれる、先づ大體方針を定めて置かんならぬ。然らばどうするか、お淨

安心せうと思ふな

土參りはやめて、たつた今阿彌陀さんが引受けるといふお助けにあづかれ、今お助けにあふから臨終待つ事なく來迎たのむことなし、何時でも大丈夫、南無阿彌陀佛の六字といふものは、死んでお淨土に參らせて貰ふお道具でない。是は私が吳々云つて置かんならん。南無阿彌陀佛の六字のお助けを御淨土に持つて行くから骨が折れる、眞宗ではさうでない、六字といふものは性根心地の確かなたつた今私の魂が御助けにあふ謂れが南無阿彌陀佛。今六字の御助けにあふと六字の主になる。そこで大丈夫が出て來る。

意業募り法體募り

二　今六字の御助けにあふといふのはどういふ御助けにあふか、墮ちる機御助けとたのむ機御助けと二つある。墮ちる機お助けも死んでからで無い今、たのむ機お助けも死んでからでない今ぞ、六字のお助けといふのは今お助けにあふ、お淨土へ參る事と違ふ、命終らんたつた今墮ちる機が墮ちん機に轉じ變ることを六字のお助けといふ、此の六字のお助けにあふから何時でもと大丈夫になる、之を平生業成と名をつける。此の事はあんた方思ひ違ひをして居る人があるかも知れんから嫌になる程いひたい。若しもたのんだからお淨土へ參れるだらう、たのんだからお助けにあへるだらうと、お助けを御淨土へもつて行くならそれは意業募り、又反對に墮ちるなりを御淨土へ行くといふなら法體募り。難しい事だね、こゝの意味だけはよく心得て置かんといかん。

南無といふは衆生の阿彌陀如來にむかひたてまつりて、後生たすけたまへとたのむ機のかたなり、つぎに阿彌陀佛といふはそのたのむ衆生をもらさずすくひたまふこゝろなり。

此の六字の御助け、二字四字のお助けは死んでからでない、今といふことを知らんならん。

私は何返もいふが、お前さんのやうな發明な人に何返もいふのは氣の毒な事であるが堪忍して吳れ。淨土眞宗の一番肝要は六字の謂れを心得る事である、六

助けましの出て來る本元

字の謂れをよく〳〵聞きわけたるが他力の信心である。

三　南無の二字は墮ちる機お助け、お淨土へ連れ込むお助けと違ふ、今お助け、今どういふお助けか、受持つお助け、引受けるお助け、受取るお助け、墮ちる機をたつた今彌陀が受取るお助けが南無、其のお助けにあふ所に助けましませの一念が出て來る。こゝが後生助けたまへと彌陀をたのんだ、彌陀を當にする、力にする、たのみにする、歸悅なり、歸稅なりといふ所。

そこで南無になつた機を、ようこそ其の機になつたぞと娑婆五十年護りづめに護られるのが阿彌陀佛の四つの字の謂れ、死んでからで無いぞ、今ぞ。吾々の望み目的は命終つて淨土死んだら佛だらう、併しそれは吾々とは一段でない五十二段違ふ、見えもせん知れもせん思へもせん、なんぼう氣張つてもあかんだらう、阿彌陀さんの本願はそこにある。それは思や思ふ程苦むぞよ、然らばどうしよう、命終つて御淨土、死んだら佛になることを大丈夫と思ひたいと思ふならば、命終つて御淨土に參る方は思はんと置け、性根心地の確かなたつた今、六字のお助けにあつて見よ、見えん淨土を見たよりも拜まん彌陀を拜んだよりも確になれる……之れを平生業成といふ。

聽聞と實地問題

四　之を實地問題にもつて來ると、かういひたいだらう。かねて聽聞させて貰つて居つて、阿彌陀さんが助けてお呉れる事も承知なら、こつちの方は此の儘といふ事も解つて居る。更に御化導聽聞して疑ふ餘地はない、參らせて下さる御本願、助けて下さる御慈悲に疑ひは無い、此の機のなりもわかつて居るが、どこがどうといふ不足な所もわからんやうな所もないが、どこがいかん、さて今でも出かけて行かんならんとなると、手に物を握つたやうに確かに思へぬ。阿彌陀さんの本願は間違ひはせん、大丈夫な御慈悲と疑ひはせん、落着いては居るが、サアとなると何ンにもつかまへ所がこつちにはないが、こゝはこんなものぢやらうか、ナンマンダブツ、こゝまで來たら皆困る。之は聽聞して居ると、初めの間は信心と

いふ事に骨を折る、信心を貰ふと今度は後生に骨を折る、今夜も逝かんならんと思ふと、參らせて貰ふ、助けて貰ふことに疑ひは無いが、愈〳〵となると、何ンにもありやせん、凡夫ぢやでこゝは負けて貰はふかナンマンダブツ、貰つたやうな貰へんやうな、戴いたやうな戴かんやうな、クシャ〳〵〳〵、こゝのはつきりする話をするために此の規則が解つて居らにやいかん。

お前さんら斯う云ひたいだらう、お尋ね申したいは外でも無いが、阿彌陀さんの御本願は疑ひはせん、大丈夫の御慈悲にアヤフヤは無い、今命終つても此の儘と安心もし落着いても居る、そこは露塵程の疑ひも無い、御信心も貰つて居る、何が尋ねたい、外でもないが、たつた今でも娑婆を立つて行かんならんとなると、向ふさんには安心して居るが、こつちの胸の中が參らせて貰ふと思へぬ、大丈夫とどうもなれん、といひたからう、そこは内證ぢや、そんな事はいふと同行の値打が下るからいはん、内證々々で地獄へ行く所だ。そんならどこが惡い、惡

向ふは明いがこちらが暗い

い事は無いが、サア今行かんならんとなると何にもない、向ふさんには大丈夫と夜が明けて居るが、こつちの胸が大丈夫だナといひたいやうな氣持がしていへません、どうしよう、といふ所だらう。これだけに困る。之は、お前さん等が、地獄行きの此の儘助けてお呉れると疑はれた、夜明けした、それを信心のやうに思ふから間違ふ、そこで愈〳〵となると何にもないわ、惡いともいへずよいともいへず、墮ちるやうにも思はなければ、參らせて貰へるやうにも思ひはしないが、よく〳〵考へて見ると確りしたものが無い。これが後生を大事に思ふ宿善の機、こゝから出て來ねば第十八願はわからぬ。第十八願の六字の謂れは此の機でないと聞こえぬ。この心配が起らなければ此の六字の謂れを聞かうともしない。宿善の機といふのは此の機の事、後生大事の機といふのも此の機の事。信心大事では無い、八十通には後生助けたまへとはあるが、信心助けたまへとはあるまい。後生ぬきの御信心は無からう。お前さんは信心助け給へぢや、解つたか。

手に物握つたやうに思へがこんにかでとよいれんにとは配心な宿善機のが

私が今お前さんに話したいのは第十八願の機の謂れ、

一には宿善、二には善知識、三には光明、四には信心、五には名號、この五重の義成就せずば往生はかなふべからずとみえたり。

宿善の機でないと此の六字の謂れは聞こえぬ。それはどんなものかといふと、阿彌陀さんの助けてお呉れる、間違さんのお慈悲、大丈夫の御慈悲はよう承知して居る、疑ひも晴れて居る、安心もし落着いても居る、私の此の機の儘もよく解つて居るが、愈魂、今夜でも行かんならんと相談すると、此の機がどうも手に物を握つたやうに大丈夫といはん、かう行かんならん。之が後生大事の思ひの宿善の機、これだけはよく聞きわけんならん、此の機の上でなければ今の六字のお助けはわからぬ。宿善開發の機でなくば法を與へるな、無宿善の機は力及ばずとあるのはこゝだ。之は私がいふまでもなく八十通の御文では三帖目四帖目が宿善の事、お前さん、そこまで來て居る人もあらうし、まだ來て居らん人もあらうが、此の話は後生一つに詮じつまつた人でなければ聞こえぬ。

詮じ詰めたら参れさうにない

そこで前に戻る、後生大事が宿善の機、愈となると衆生と阿彌陀さんと差向ひ、今夜でも行かんならんが、萬劫億劫にも取返しのつかぬ後生だと大事の上に大事をかけると、向ふさんに疑ひは無いが、此の機の方が、あア、えーナ、大丈夫とどうも云つて呉れん、かういふ所だ。どんなものぢや、といふと参れ相にない、が表、裏からいへば墮ち相な。心一ぱい出して見たら墮ち相な、参れ相にない、詮じつまつたらこれより外にござりません。そこまで行つたら聽いた事も用にはならぬ、覺えた事も間にあはず、知つた事も役には立たぬ。たゞあるものは方角無しの眞闇がり、どうしよう〳〵之を後生大事の宿善の機といふ。

愈後生と踏み出して、大事の上に大事をかけると、向ふさんに疑ひは無いけれど、私の此の心が、今夜でも出掛けて行かんならんと大事をかくりやかくる程、どうもつかまへ所が無い、眞闇がり。此の機一つがどうなります、かう出て

來ればよい。かう投げ出したのを宿善開發の機といふ。

南無といふは衆生が阿彌陀如來に向ひたてまつりて後生たすけたまへとたのむ機の方なり。

こゝをどうする、心配するなよ、參るとなつたら自分で行け、墮ちんとなつたら勝手にせよ、墮ちると知つたらそこ受持たう、參れんと解つたらそこ引受けよう、たゞかいな、たゞぢやぞよ、こゝは無條件ぢや。お淨土と違ふ、墮ちる機を今受持つて貰ふ。參れんとわかつたらそこ受持たう、墮ちると知つたら其の機かかへて泣くのぢや無い、待ちかねて居る親がある程に、われにまかせよ。墮ちる機お助けはたゞか、たゞでよい、生れついたる生地のまゝ、ありべがゝりの其のまんま、墮ちる實機の其のまゝを、受取る事を工夫した間が五劫ぢやぞよ、こゝを受取るもとでを拵へた間が、兆載不可思議永劫ぢやぞ——墮ちると知つたら其の機かゝへて泣くのぢや無いぞ、參れんとわかつたら其の機おさへて泣くのぢや無いぞ、參れん機があつた故、參らせにやおかんの親ぢやぞよ、墮ちる機がある故に墮さん親が出來たのぢやで、われにまかせよ。

ありべがゝりの其儘

能歸の受手前

六　そこで能歸の受け手前、墮ちる機がお助けにあふ所南無といふは衆生が阿彌陀如來に向ひ奉りて雜行すてゝ、後生助けたまへとたのみ申す機の方なり、其の勅命の聞こえた能歸の受手前。墮ちるまゝぢやぞよ、參れんまゝぢやぞよ、生れついたる生地のまゝぢやぞよ、こゝ受取るのは此の彌陀ばかりぢやぞよ、其の勅命の受手前、己れ忘れて後生助けたまへといふ所、阿彌陀樣に墮ちん事の心配と參る事の世話だけは渡す、渡いたら受持ち手を力にせんといかん。渡いた心の落着きは、受持つてお呉れるお方を力にする、それがたのむといふ事、眞宗ではそれぢやから、まかせだのみ、すがりだのみ、歸悅なり歸稅なりといふ所、そこで墮ちる機がお助けにあつて墮ちん機に轉じ變る相が南無。其の受け手前——。

苦拔けの出來

そんな事とは知りませなんだ、たゞ今迄は、御化導聞いて信心貰うて、彌陀た

るところ

のんで疑ひ晴れて、參らせて貰ふと落着いて、助けて貰ふと夜明けして、それからで無いと御助けにあへんかのやうに思うて、なれんが〳〵〳〵と、なが―い間、此の事一つに困りました、と行け、あなたの勅命承れば、まるで反對、參れるとなれん此の機を受持つ、助かるとなれんからこゝ引受ける親であつたのか、と彌陀に向へ。こんな機受持つ親とは存じませなんだ、こんな機引受ける親とはえう思ひませなんだ、たゞ今迄は聽いて信心貰うて、大丈夫と安心して落着いて來なければ、阿彌陀樣は助けて下さらんかのやうに思ふたで、なが―い間、信心拵へに骨折りました。あなたの勅命承りや、たゞのたゞ、生れついたる生地のまゝありべがゝりの此のまんま、落ちる實機の此の儘を受取る親であつたのぢやな、と彌陀に向ふのぢやぞ。

大體墮ちる機がお助けにあふ所の相を南無といふ、たのむといふ、眞宗にはたのむについてもきまりがあつてまかせだのみ、すがりだのみ、今の讃題でいふと、

阿彌陀ほとけの御袖に、ひしとすがりまいらするおもひをなして、後生をたすけたまへとたのむ

墮ちる機、參れん機を渡した所の落着き、受持手に安心した其の相が後生たすけたまへ。まづ一服して……。